資　料

七千石堰について

七千石堰

水をせきとめる堰

七千石堰は、慶応三年（1867年改修工事終わる）に当時の北郷代官「荒専八」が、それまであった堰を改修しました。その頃の堰は、木や竹などをたてとよこに組み、その中に石をつめたものでした。そのため大雨になると流されてしまうことが多かったそうです。現在はコンクリートで作られ大水にもたえられるようになっています。

用水路を作って水を引く

七千石堰から取り入れた水は、用水路を通って真野川の北側にある「唐神ため池」から「南右田」及び「南海老」まで送られています。その長さは10kmもあります。この用水路は、自然落差を利用して作られています。このため土地の高い所から低い水田に水を引くことができるようになっています。

唐神ため池

取れる米が七千石

この堰ができてから、多くの水田をうるおすことができるようになりました。そして米がむかしの単位で、7000石（約18000俵）も取れるようになったので、この堰を「七千石堰」とよぶようになったのです。

土樋ふきんの用水路

この用水路はどこからどこまで流れているのか話し合ってみましょう。八沢小学校の前も流れています。

※米１俵は60kg